

10 Mayer–Vietoris 完全列 (3)

コチェイン複体の短完全列 $0 \rightarrow \mathcal{A} \xrightarrow{f} \mathcal{B} \xrightarrow{g} \mathcal{C} \rightarrow 0$ が誘導するコホモロジーの長完全列

$$\begin{array}{ccccccc} \cdots & \longrightarrow & H^{k-1}(\mathcal{B}) & \xrightarrow{g_{k-1}^\sharp} & H^{k-1}(\mathcal{C}) & \xrightarrow{\delta_{k-1}} & \\ & & & & & & \\ & \curvearrowleft & H^k(\mathcal{A}) & \xrightarrow{f_k^\sharp} & H^k(\mathcal{B}) & \xrightarrow{g_k^\sharp} & H^k(\mathcal{C}) \xrightarrow{\delta_k} \\ & & & & & & \\ & & \curvearrowleft & H^{k+1}(\mathcal{A}) & \xrightarrow{f_{k+1}^\sharp} & H^{k+1}(\mathcal{B}) & \longrightarrow \cdots \end{array}$$

を考える。 $H^k(\mathcal{A})$ における完全性は次のような diagram chasing によって示される。（コチェイン複体 \mathcal{A} を構成するベクトル空間を A^k （ただし $k \in \mathbb{Z}$ ）と書き、線形写像 $A^k \rightarrow A^{k+1}$ は $d_A^{(k)}$ などと書かずに単に d であらわす。 \mathcal{B} , \mathcal{C} についても同様。）

〈 $\text{Im } \delta_{k-1} \subset \text{Ker } f_k^\sharp$ の証明〉 任意に $[\alpha] \in \text{Im } \delta_{k-1}$ をとる。 Im の定義により $[\alpha] = \delta_{k-1}([\gamma])$ とあらわせる。ただし $\gamma \in C^{k-1}$ は $d\gamma = 0$ をみたす。

ここで δ_{k-1} の定義を思い出す。 $g_{k-1}(\beta) = \gamma$ となる $\beta \in B^{k-1}$ をとり、さらに $f_k(\alpha') = d\beta$ をみたす $\alpha' \in A^k$ をとる。自動的に $d\alpha' = 0$ であることに注意して、 $\delta_{k-1}([\gamma]) = [\alpha']$ と定めるのだった。前段落では $[\alpha] = \delta_{k-1}([\gamma])$ としたのだから、 $[\alpha] = [\alpha']$ である。

したがって

$$f_k^\sharp([\alpha]) = f_k^\sharp([\alpha']) = [f_k(\alpha')] = [d\beta] = 0.$$

すなわち $[\alpha] \in \text{Ker } f_k^\sharp$ である。

〈 $\text{Ker } f_k^\sharp \subset \text{Im } \delta_{k-1}$ の証明〉 任意に $[\alpha] \in \text{Ker } f_k^\sharp$ をとる。すると $f_k^\sharp([\alpha]) = 0$ つまり $[f_k(\alpha)] = 0$ である。ゆえに $f_k(\alpha) = d\beta$ をみたす $\beta \in B^{k-1}$ が存在する。そのような β を任意に一つとり、 $\gamma = g_{k-1}(\beta)$ とおく。すると

$$d\gamma = d(g_{k-1}(\beta)) = g_k(d\beta) = g_k(f_k(\alpha)) = 0$$

である。

$d\gamma = 0$ であることから $[\gamma]$ が定義される。これについて $\delta_{k-1}([\gamma])$ は何か、定義にしたがって順番に考えてみると、 $g_{k-1}(\beta) = \gamma$, $f_k(\alpha) = d\beta$ より $\delta_{k-1}([\gamma]) = [\alpha]$ である。したがってとくに $[\alpha] \in \text{Im } \delta_{k-1}$ であることがわかった。

51. 上記の長完全列の $H^k(\mathcal{B})$ における完全性を示せ。

52. 上記の長完全列の $H^k(\mathcal{C})$ における完全性を示せ。[ヒント：しばらく考えてわからなければ、L. W. Tu 『トゥー 多様体』（裳華房）定理 25.6 の後の説明をみよ。]

53. 多様体 M 上の微分形式 ω について、その台 $\text{supp } \omega$ とは $\{p \in M \mid \omega_p \neq 0\}$ の M における閉包のことである。

コンパクトな台をもつすべての微分 k 形式からなるベクトル空間を $\Omega_c^k(M)$ で表す。外微分作用素 d は $\Omega_c^k(M)$ を $\Omega_c^{k+1}(M)$ の中に写す*。コチェイン複体

$$\cdots \xrightarrow{d} \Omega_c^{k-1}(M) \xrightarrow{d} \Omega_c^k(M) \xrightarrow{d} \Omega_c^{k+1}(M) \xrightarrow{d} \cdots$$

のコホモロジ一群 $H_{\text{dR}, c}^k(M)$ を、 M のコンパクト台をもつ de Rham コホモロジ一群という (M がコンパクトなら普通の $H_{\text{dR}}^k(M)$ と同じもの)。

さて、 M の開集合 W 、 \tilde{W} のあいだに包含関係 $W \subset \tilde{W}$ があるとき、 $\omega \in \Omega_c(W)$ は、 W の外の各点における値を 0 と定めることで $\tilde{\omega} \in \Omega_c(\tilde{W})$ へと拡張できる。この「ゼロ拡張」を与える線形写像を $z_W^{\tilde{W}} : \Omega_c(W) \rightarrow \Omega_c(\tilde{W})$ であらわす。そのとき、

$$\begin{aligned} f_k : \Omega_c^k(U \cap V) &\rightarrow \Omega_c^k(U) \oplus \Omega_c^k(V), & \alpha &\mapsto (z_{U \cap V}^U(\alpha), -z_{U \cap V}^V(\alpha)), \\ g_k : \Omega_c^k(U) \oplus \Omega_c^k(V) &\rightarrow \Omega_c^k(M), & (\beta_1, \beta_2) &\mapsto z_U^M(\beta_1) + z_V^M(\beta_2) \end{aligned}$$

とおけば、

$$\begin{array}{ccccccc} & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \downarrow d & & \downarrow d & & \downarrow d & \\ 0 \longrightarrow \Omega_c^k(U \cap V) & \xrightarrow{f_k} & \Omega_c^k(U) \oplus \Omega_c^k(V) & \xrightarrow{g_k} & \Omega_c^k(M) & \longrightarrow 0 \\ & \downarrow d & & \downarrow d & & \downarrow d & \\ 0 \longrightarrow \Omega_c^{k+1}(U \cap V) & \xrightarrow{f_{k+1}} & \Omega_c^{k+1}(U) \oplus \Omega_c^{k+1}(V) & \xrightarrow{g_{k+1}} & \Omega_c^{k+1}(M) & \longrightarrow 0 \\ & \downarrow d & & \downarrow d & & \downarrow d & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \end{array}$$

がコチェイン複体の短完全列となることを示せ。

問題 53 でえられた短完全列に定理 10.1 を適用して $H_{\text{dR}, c}^k$ に関する Mayer–Vietoris 完全列をえる。これは具体的な計算に役立つか、たとえば「Poincaré 双対性」の証明にも用いられる†。

次の問題では、Poincaré 双対性の特別な場合にあたる「連結かつコンパクトな n 次元多様体 M について、さらに M が向きづけ可能ならば $H_{\text{dR}}^n(M) \cong \mathbb{R}$ である」という事実を使う（向きづけ可能性の定義は次回与える）‡。3 次元実射影空間 \mathbb{RP}^3 は向きづけ可能なので、 $H_{\text{dR}}^3(\mathbb{RP}^3) \cong \mathbb{R}$ である。

54. $H_{\text{dR}}^k(\mathbb{RP}^3)$ を $0 \leq k \leq 3$ について求めよ。ただし $H_{\text{dR}}^3(\mathbb{RP}^3) \cong \mathbb{R}$ は既知としてよい。
[ヒント：問題 46 と同様の開集合 U 、 V に関する Mayer–Vietoris 完全列を用いる。]

*なぜなら $\text{supp } d\omega \subset \text{supp } \omega$ だから。

†R. Bott & L. W. Tu, *Differential Forms in Algebraic Topology*, Springer の第 5 節をみよ。

‡同じ前提のもとで、 M が向きづけ可能でなければ $H_{\text{dR}}^n(M) = 0$ 。